４・５歳児合同保育実践事例

「少人数保育の限られた関係性の中で，人と関わる力を育てるために」

男児３名　女児５名　計８名

１　子どもの実態

○　年長男児２名 女児３名，年中男児１名 女児２名，合計８名の異年齢合同の学級である。年長組と年中組が一緒に生活し，２担任がおよそ２週間毎に交代で主担任を務めている。どの子も教師や友達に親しみをもって関わりながら，安心して過ごし，年長児と年中児とが分け隔てなく，同じ学級の仲間として互いに親しみをもって生活している。

○　運動会をきっかけにクラス全体での遊びや活動が増え，一人一人が自信をつけ，その子らしさが発揮されるようになってきた。少人数であるために，自分たちで遊びを考えて遊んでいく時に，友達関係が固定化し，その中で発信力のある子どもがリードし，周りの子どもがそれに従うことが多い。楽しい場面では，互いに受け入れ合って遊ぶが，自分の思いとずれてきたり，つまらなさや不満，「こうしたらいいのに。」と違う考えが生まれたりすると，伝えたい相手ではなく，教師に思いを伝えたり，違う遊びを始めたりする。

○　特に，年中児は年長児と一緒になって遊び出すが，遊びの中で，自分の気持ちをうまく言語化できなかったり，自分一人では言い出せなかったりして，タイミングを逃してしまうことが多い。年長児も自分のことに精一杯で，年中児の様子に気が付かなかったり，気が付いても「どうしたの。」と声を掛けるが，察して動いたりすることは難しく，教師も一緒に遊びながら仲介役となっていくことが多い。

【取り上げる事例に関わって】

○　年中組のＡ児とＢ児の遊びの場面である。Ａ児は，年長児とＢ児との遊びの場には関わらず，教師を相手に空き箱をつなげて，坂道を作り，テープ芯を上手く転がそうと試行錯誤しながら遊ぶことを楽しんでいた。Ｂ児は年長女児と一緒に遊んでいたが，年長女児の遊び方と興味の方向がずれてきたことで，その遊びとは別に，ウサギになって草のつい立てを使って家を作り，ごちそうやお面を作るなど自分なりにやりたいことを見付けて取り組んでいた。その二人が，互いのしていることが気になり，自然と誘い合って，教師と三人でＢ児のつい立てのお家の中で遊んだり，Ａ児のテープ芯転がしの場を一緒に作ったりして遊び出した。Ａ児，Ｂ児は，年長児と遊んでいる時は，何となくその場の雰囲気に合わせて遊んでいることが多かったが，二人になり，それぞれに「こんなふうにしたい。」と言葉にして教師や友達に表し始めた場面である。

２　教師の願い

教師も一緒に遊びながら，一人一人の気持ちが安定し，自分のしたい遊びに向かっていく中で友達と関わり，「～にしようよ。」など自分の思い付いたことを友達に表し，自分の言ったことやしたことが遊びの楽しさにつながるうれしさを味わってほしいと願った。

３　保育の実際（10 月 18 日）

幼児の姿と教師の援助　　____：教師の援助	教師の援助の意図・考察
登園し，みんなで遊戯室で遊んだ後，保育室に戻り，それぞれに友達と昨日の続きを始めた。Ｂ児が「先生，一緒に続きしよう。」と教師の手を引き，段ボールで作った草のつい立てを用意しようとした。①「そうだね，約束していたよね。」と声を掛けた。Ｂ児「先生，今日は何することにする。」と教師に話した。それを聞いていたＡ児は「先生がお母さんのことにしようよ。」と言葉を発した。Ｂ児は，「じゃあ，Ｂちゃんたちが子どもってことね。」と答えた。教師は，②「分かった。じゃあ，私がお母さんになるね。」と言うと，「先生，優しいお母さんのことね。」「お料理作ってね。」などと，会話を楽しみながら，昨日と同じようについ立てで家を作った。③教師も一緒に遊びながら，「お母さん，ここでお料理作	①②③　「昨日の続きをしたい」という子どもの姿に，昨日の遊びの楽しかった思いと今日の続きの遊びへの期待感をもっていると捉えた。この気持ちが満たされ，「今日はどんなことをしようか」と自分なりに考えることの楽しさや「今日も一緒に続きをやろう」と同じ思いをもって遊ぶ楽しさを感じてほしいと願い，教師も一緒に遊ぶ仲間の一人として関わった。

ろうかしら。」と声を掛けると，二人は，「はい，お母さん，お野菜。」「今日は，ニンジンのジュースがいいよね。」「食器もいるね。」などと会話をしながら，道具を運び入れ始めた。④教師が，「まな板がないな。」とつぶやくと，年長児が持っている手作りのまな板と包丁を二人で借りに行った。年長児に「いいけど，何に使うの。」と聞かれると，「あのね，お料理作るのに使いたいの。」など答え，借りてきた。道具が増え，だんだんと場が狭くなってきたので，⑤教師は「棚があったら，食器を片付けられるし，お部屋も広くなっていいなぁ。」とつぶやいた。すると，A児が「Bちゃん，棚つくろう。お母さん，棚が欲しいって。」と声を掛けた。B児は「分かった。」と言いながらも，変わらず食器類をあるだけ運び入れている。A児は，一人で近くにあった積み木を並べえて，その上に食器を並べていったが，積み木が足りず，困った表情を浮かべた。B児はその様子に気が付き「どうしたの。」と声を掛けるが，A児は言葉が出てこない。そこで，⑥教師は，「Aちゃん，どうしたのかしら。」とお母さんになりきって投げ掛けた。すると，B児が「積み木が足りなくて困っているんじゃない」と教師に答えた。A児は，教師の顔を見ながら，「だって，お部屋にもうないんだもん。」とつぶやいた。すると，B児は「廊下にあるよ。取ってこよう。」とA児に声を掛けた。⑦教師は，「Aちゃんよかったね。」と声を掛けると，二人は，「行ってくるね。」と教師に声を掛け，積み木を廊下から運び，棚を作り始めた。教師も一緒に積み木を並べて，棚を作っているうちに，次第に積み木の中から，必要な形を選んで構成し，食器類を二人で並べ始めた。⑧教師は，「ちょっと，お母さん，お買い物に行ってくるね。その間に，食器を棚に並べておいてね。」と声を掛け，場を離れた。すると，「お母さん，お買い物だって。二人でがんばろう。」とA児。二人で相談しながら棚を作り，食器を並べ，出来上がると「お母さん，できたよ。」とうれしそうに教師を呼びに来た。

時折，「クッキー屋さん，まだやらないね。」など，年長児のしている遊びにも気持ちを向けたり，他の遊びをしていた年中男児が二人の遊びの場に関わってくることも受け入れながら，冷蔵庫を作ったり，布団を並べたりしながら，遊びを楽しんだ。

④　二人は，年長の友達が手作りのまな板を持っていることを知っている背景がある。教師が年長児との接点がもてる一言をつぶやくことで，「貸して。」と自分から関わっていくきっかけができることを願い，関わった。

⑤　それぞれに自分の思い付いたことをして楽しんでいると捉えた。遊びに必要な物を二人で作ろうと共通の思いをもち，一緒に場を作る中で，自分の考え付いたことを言い表し合って，一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしいと願った。

⑥　A児には，思いがたくさんあるのだが，友達に自分から話すには言葉が整理できずに黙ってしまうところがある。しかし，教師が支えると，安心して，言いたいことを伝えられるようになってきているので，教師が遊びの流れの中で，さりげなく，A児の気持ちに寄り添うことで，友達の声掛けに答えられるよう援助した。

⑦　A児にとって，B児が自分の思いを感じ取ってくれていたこと，自分が言葉にすることで友達に思いが確実に伝わったことを実感できる場面であったと考える。教師が，「良かったね。」と言葉にすることで，A児にとってもB児にとっても，友達と思いが一緒になる嬉しさを感じられるように援助した。

⑧　遊びの中で，教師を仲介として二人がつながっていたが，この場面では，教師がいなくても二人がつながっていると捉えた。また，やりたいと向かっていることも二人で実現可能なことであったので，その場を離れ，二人でやりとりを楽しみながら遊びを進めていけるように願った。

4　考察

○　自らの遊びの中で，年長児との育ちの違いで，「楽しさ」にずれがでてくることがある。また，一緒に遊んでいても，下学年の子どもにとって，遊びの幅が広がる一方で，受け身になりがちで，遊ばせてもらう状況になったり，言いたいことがあっても言い出せなかったりすることが多い。この状況が日常になると，主体的に考え，試行錯誤しながら遊びを作っていく経験の不足になることが懸念される。今回の事例では，年中の二人が，遊ぶ場を自分たちで作っていくことで，遊びの場の基盤ができ，安定して遊びに向かえる心情につながったと考える。個々の育ちや特性を理解し，一人一人がやりたいと思ったことにじっくりと取り組める状況を作ること，その中で，友達と一緒に遊びを進めたことが「面白かった」と実感がもてる体験を大切にしていきたい。

○　極少人数であるがゆえに，教師も仲間の一人として遊びに参画していく場面が多い。子どもが教師に依存するのではなく，教師との関係から安定を得て，気持ちを自分から友達に向け，子どもたち同士の関わりが生まれる状況を意図して作っていく必要があると考える。そのためには，育ちに必要な経験を見極め，そのためには，どのような関わり方が適切であるのか，育ちの見通しをもった関わり方をすることが大切である。